Osaka University Knowledge Archive

Title	被服と流行
Author(s)	中嶋, 朝子
Citation	デザイン理論. 1972, 11, p. 40-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53655
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

被服と流行

中　嶋　朝　子

I．被服と流行

現代の我々は国際的な接触の機会が多く，様々な世界の被服を見ることができる。EXPO. 70では民族衣裳の競演をみる思いがした。同じ人間が着るものであるにも拘わらず千差万別である。また服装史をひもといてみる時，その変化に驚ろく。

一見，千差万別・千変万化の様相をみせている人類の服装も，これらを類別してみると比較的簡単になる。Flügel[①]は Stratz の分類と Müller-Lyer の分類を紹介している。その概要は次の通りである。

『Stratz は，(1) Primitive Costume

(2) Tropical Costume

(3) Arctic Costume

の三つに分けて，これは衣服自身の性質に基づくところの分類である。

Müller-Lyer は，(1) Fixed Costume

(2) Modish (Fashinable) Costume

の二つに分けていて，これは社会学的分類で，衣服自身の性質に関係しているのではなく，心理的・歴史的・社会的関係において把握された分類である。

Fixed Costume を細別して

Geographical costumes { National / Local / Family

Uniforms { Military / Occupational / Associational

としている。この Fixed Costume の本質は，(1)時間的には比較的永続するが，空間的には大きな変化がある。つまりそれぞれの社会団体によって独特の衣服形態をもっている。(2)一般の社会に対し，特定の人々のグループを特徴づけている。(3)グループ内の個人と個人との間に形態的同一性がある。

これに対し，Fashionable Costume は，(1)時間的に早く変化し，この変化こそがまさにその本質的特色である。しかし空間的には僅かの変化しかない。つまり同じ文化の影響に支配され，適当な交通機関のあるところに速やかに拡がる傾向をもちつゝ世界中に伝播する。(2)グループとか民族・国家による区別がなく，模倣が原則である。(3)個人個人の服装が着用者の個性的な趣味嗜好によって変化がある。』と。

私は Fixed Costume 特に民族服・民俗服に興味をもっているが，被服の全貌を把握するには Fashionable Costume についても認識を深めねばならないと考え，流行に関する書物を多少読んではいたものゝ現在私なりの認識を体系化するまでに深まっていない。まず流行に関する文献により諸学者の考えを整理してみることが先決だと考えた。しかし文献を集めることも至難なことで，引用文献としてよく紹介されているものゝ中には，日本では現在入手困難なものがある。たとえばドイツの社会学者 Georg Simmel の "Fashion" International Quarterly 1904～1905，である。

ここでは入手できた社会学者・心理学者達の流行に関する論説に基づいて，被服の流行がなぜ存在し，如何にしてつくられ，そしてその流行を支えている

人間の心理に触れることにしたい。

II. 流行の概念・本質

流行とは英語の Fashion に相当する日本語である，という見解に基づいて取扱ってゆく。流行という言葉は社会学者・心理学者・経済学者・産業人・一般大衆などによって異なった立場で認識されている。社会学者・心理学者は流行を社会集団の現象として把握し，経済学者は消費者行動の対象として研究し，産業人は流行を商品化するための流行現象の追求と流行のスタイルの創造に意欲を燃やしている。一般大衆は流行を追うことに余念がないという一面がある。かゝる立場の相違はあっても，現在自由諸国の人々の多くは流行と無関係には生きていない，むしろ流行現象に敏感である。

ところで流行の概念については，諸学者の見解は大体共通している。荻村昭典氏[②]は「流行は概念的に定義すれば，社会現象の一つで，一定の社会の中で，ある一定の期間内，その社会の相当広範囲の人々が，趣味嗜好・生活態度・思考判断などにおいて，模倣を媒体としてとる，流動的な社会的同調行動の様式である。社会的同調行動をとる反面，自己を他者から区別しようとする自己顕示の欲求をみたしながら，一定の社会の中でくりかえされる，一時的で非合理的な行動の一形体である。」と要約している。さらに流行について詳細な見解を述べている学者達の諸論文がある。

アメリカの社会心理学者 Kimball Young [③]は流行についての書出しに，『流行は以前は個人間の接触によってゆっくりと拡がり変化した，しかし今日では急速な伝達と輸送の手段によって急速に拡がり変化する。それ故，流行は大衆ならびに集団の行動と関連している。ここでは Fashion・Fad・Craze の本質と，これらの心理学的特徴と流行の変化の社会的機能について取扱う。』と述べ，『流行は現在広く行われている慣例・様式・作法，あるいは特有の表現とか表象，あるいは慣習それ自体が変化をゆるすところのこれらの特殊な文化的

特徴として定義することができる。もし我々が慣習を社会行動の固定的で持続的な現われと考えるならば，流行はこの一般的な受容の範囲内でゆるされる変化である，と考えることができる。換言すれば，流行とは形態において周期的変化を主題とするところの文化において，一般に流布する様式というものにあてはまる。衣服・建築・乗物・会話，そして芸術や庶民哲学における流行は現われたり消えたりする。』と概説している。

Karlyne Anspach[④]は，『流行は，広義において，慣習のようなもので，話し方・歩き方・食事・服装などの日常生活に受容れられた習慣である，と定義することができる。しかし慣習のように，そのあるが如きを保存する傾向をもつのとは違って，流行は変化を重んじる。慣習は過去を尊重するが，流行は現在を尊重する。一つの流行が他の流行に展開してゆく時，古いものは保持されつゝも新しい何かが加わる。それは新しい流行を特徴づける新しい要素である。』と述べている。

何れも慣習との相違を指摘することによって流行の概念を明らかにしている。そして流行の範囲を人間の文化現象，特に民間に広く行われているそれらを主なるものと考えている。これに対し Herbert G. Blumer[⑤]は次の如く述べている。『流行は服装において明らかであるが，広い分野に作用する。その分野は，絵画・音楽・演劇・建築・室内装飾・接待・文学・医学療法・経営・政治・哲学・心理学・社会科学，そして物理学・数学の分野にまで及ぶ。絶えず変化して止まない社会生活の如何なる分野にも，流行はその侵入路を開かれている。これに対し，流行は原始社会・農民社会・またはカースト社会のような，永い間の慣習を通して容認され確立されたところのものに密着している固定した社会では殆んど見受けられない。Simmel も，やはり Folk とか Caste の社会，そして現代社会においても公益事業団や宗教団体のようなところでは身分を考えることは不適当であるから，流行は存在しない，との説明をあたえている。』と。このように流行は社会生活において変化が容易に起りうるような社会

制度のところでは存在するが，固定した社会制度のもとでは見受けられないとの見解は何れも共通している。

Kimball Young[3]も同様のことを述べている。『流行は基本的道徳観を具現した社会的慣習（mores）の中には存在しない；流行は道徳とは無関係な民間習俗の間に存在する。流行を支えている思想とか行動の社会的流動は永久的ではなく表面的である，そしてゆっくり変化するところの mores とは対照的に，流行は高度に一時的でつねに流動している。しかも流行期には流行は重要で意義深いように見える。流行は社会的儀式の一面である。Herbert Spencer の言った如く，流行は儀式的な面を持っている。』と。彼の言うように，流行はたしかにお祝いやお祭りの儀式のように大衆を惹きつける魅力をもっている。この点を指摘しているのはユニークな見解である。

流行は慣習よりは流動的で表面的であるが，流行の変化のもっと皮相的な姿として，“fad” または “craze” “rage” がある。Young[3]によれば『“fad” は着物とか装飾の細部のものに限定されていて，その効果はつねに異様で“悪趣味”であるとして，保守的な人々によって容認されない。“craze” または “rage” はもっと広範囲で持続性のある fad である，そして形態において craze は刺戟的で強烈で興奮をあたえる。それは確かに精神的流行性がある。』と。荻村氏[2]によれば，『“craze” は，一時的で熱狂的な社会的同調現像に使われる。これは社会的に広範囲に影響を及ぼすもので，大衆的愚行ともいわれる。“fad” は fashion より範囲や期間が限定されたものに使われる。たとえば，一時的に普及してすぐすたれてしまうものとか，または限られた狭い範囲の人々の間で普及し，とかく社会の非難を受けやすいものに使われる。』と。

Blumer[5]は流行についての執筆の冒頭に，『fads と fashion とは根本的に異なる社会現象に関連している。流行はこの二つのうちではより重要である。』と，そして Collective taste の一ジャンルとして fads について詳しく述べている。『fads はゲーム・リクリエーション・接待・食事習慣・健康と民間療

法・服装・装飾・言葉・民間信仰のような集団生活の広く異なった領域にわたって起る。けれども fads は表面的には fashion と似ているが，実際には集団行動の別のジャンルを構成している。最も著るしい相違は fads が歴史的流れをもっていないことである；それぞれの fads は前のものとは独立して起り，後にくるものをあたえない。この別々の分離した自由に流動する特性は fads が fashion とは違って，集団行動の形態や構造をとるところの規則正しい社会的過程の役割を果していないことを意味する。“faddish” という言葉の軽蔑的な言外の意味は fads の異様で問題多い情況を指摘している。fads は階級組織の社会のいずれの階級からも拡がる。 fads は“かげろう”である。 fads は craze や boom のパターンを辿る。目ざましく刺戟の強い外観を呈してはびこり，突然注意を惹きつけて，衝動的な採択を誘導し，たゞその魅惑を使いはたすのみで急速に衰退する。fads は伝統的な社会でも現代社会でも如何なるタイプの社会にも起る。その普遍性は， fads が人間存在において自然に起りうる根源をもっていることを暗示している。』と，以上のように，fads が如何なる社会制度のところでも存在するのに対し，流行はカースト制度のような固定した社会には見られない。流行は歴史の流れの中に存在し，その現象形態は時代の文化を象徴している，のとは根本的に異なっていることを強調している。

III. 被服の流行

流行は服装の中に顕著にみられる，とは上述の学者達の記述でもあり，一般民衆も是認するところであろう。この被服の流行について考察することを通して，流行に関する理論にも言及する。

(1) 流行はなぜ存在するか

前述の如く，流行は原始社会やインドのカースト社会のような固定した社会には殆んど見受けられない。Karlyne Anspach[④]は，『流行は相異する社会集団が存在するところで起る。流行の動きは上層と下層のグループ間の垂直方向，

あるいは同じ階層のグループ間または同じグループのメンバー間の水平方向である。グループ間またはグループ内の流動をゆるすところの階級制度の社会は，流行の起原には都合がよい。グループ間の階級的差別のような要素，グループ間の緊密な接触，一つのグループから他のグループへの流動の速度は流行の移動に影響する。』と，流行の起りやすい条件を述べている。

Flügel[①]も流行の起原を階級制度の中に認めて次の如く述べている。『固定したコスチュームの制度が効果を奏する限りでは，それぞれの社会階級はその階級に属したコスチュームを着ることで満足している。しかしある階級と他の階級との間の障壁が取除かれやすくなると，つまりある階級が上の階級の地位を熱望しはじめると，階級を特徴づける当面の印とかシンボルが危うくなってくることは明らかなことである。というのは称讃され，羨やましがられる階級の人々の真似をするのは人間の基本的な癖であるから。それ故，下の階級の人々は上の階級の人々の真似をする傾向がある。同時に，上流の人々の衣服や徽章を複製することによって模倣の第一歩を踏み出すことになる。しかし上流社会では，彼等の優れていることを示す印を取除くことを喜こばない。そこで彼等は次の二つの方法で彼等の服装の差別を保持しようとする：(1)彼等上流社会の独特の服装の使用を他の階級の人々が用いないようにする奢侈禁止令を出すことによって，(2)他の階級の人々が複製して用いるので，その真似られた服装を放棄して，新しい形の着物を採用し，階級差別を再び確立しようとすることによって。(1)の方法は度々試みられたが，滅多に効果がなかった。そこでおそかれ早かれ(2)の方法に訴えなければならなくなり，かくして流行は生れた。』と。我が国における平和な江戸時代の階級的社会制度を基盤として生れた服装にはこれを物語る実例が多い。階級制度の社会では，流行は小部分の人々の間に始まり，それが次第に上流社会に普及し，流行の出現は上流社会の間や都会においてのみ見られた。西洋においても同様で，貴族の間にのみ流行の存在が顕著であった。ところが社会構造の変化と共に流行のあり方が変化してきた。

フランス革命は中産階級の勃興，次いでデモクラシーの勃興を誘発し，流行は必然的に下の階級に拡がり，社会全体が流行の波にのまれてしまう。しかし完全なデモクラシーの社会になってしまうと，真似される優れた階層がなくなり流行における競争は終ったかのように見える。しかし実際には流行の貴族性は形を変えたのである。即ち高等売春婦社会・舞台・スポーツなどがその貴族性に寄与していた。さらに産業革命による経済界の動きは，流行が総ての階級に拡がる時，大量生産と輸送と分配の近代化により最新で一流のモデルを急速に大量に相当安価に複製して供給するようになった。そして二十世紀後半の流行はマス・コミの媒体の発達と共に巨大化し，大量生産・大量販売の媒体として必要欠くことのできない役割を果している。そして今日では世界的規模で流行が伝播している。近世の流行が上下の垂直方向に伝播したのに対し，今日の流行は水平方向に急速に安価に拡散し，商業的利益を得るために流行の回転速度が著るしく増大している。

このように，階級制度から起った流行は下の階層者による上層者の模倣と，両者間の競争・個人間の競争，つまり人間の社会生活において優者になりたいという本能に基づいて推進する。阿閉吉男氏[6]も，『流行は絶えず創出者と追随者をもっており，それは前者に対する後者の模倣の過程のうちにあらわれる。ある時期の服装上の支配的なスタイルの創出者が必要であると同時に，またその追随者も必要であり，両者の何れを欠いても，流行は成立しない。』と。以上の如く，流行の存在は結局人間の社会生活を支えている模倣と競争の本能に基づいている。つまり模倣と競争とが流行の推進力となっている，といえる。

(2) 流行は如何にしてつくられるか

被服の流行の起原について Madge Garland[7]は，『わたしたちの知っている最初の流行意識をもった女性は，古代ギリシャの前の時代にクレタ島を中心として栄えたミノスの宮廷の女性達である。』と述べている。女性らしい直観に

基づいた発言である。彼の女達の服装は写真(1)のようなスタイルであった。

Flügel[①]は次の如く述べている。『個々の流行はその起原において他の社会的産物の如く促らえ難い，それは丁度，噂や酒落が人々の口から口へ伝わってその起原がわからなくなるのと同様，その源を辿ることはむつかしい。一般的概念から言えば，流行はパリに住む神秘的権威者達によって創始されるものである。事実永い間婦人達の流行の多くがパリで生れてきた。流行は早く拡がるが，しかし世の中の隅々にまで届くには多くの個人個人の手を経なければならない，そして伝わってゆく間に幾分変ってゆく傾向をもっている。』と。つまり，個人個人が流行を採り入れてゆく時に個性化が行われるわけである。

写真1．ミノスの宮廷の女性の服装

次に流行の形成に必要な要素の概要について，彼の見解は次の如くである。『如何なる場合でも，新しい流行を創り出すためには新しいデザインをつくるだけでは充分ではない。デザインが流行となるためには人々によって着用されねばならない。この場合，流行についての評論家が人々に印象づける発言をすることはかなり効果がある。また卓越した人は流行をつくるのにあずかって力がある。それが被服の分野においてだけでなく，如何なる分野においても卓越しているというだけで。それと同時に流行を取扱う時には，我々は衣服の個々の創始者を考えるだけでなく，その衣服を着る人々の集団心理をも考えること

が大切である。集団心理は社会心理学者にとって興味ある問題のようで，彼等によれば成功した流行は時代精神を表現しているものであるという。しかし流行の中にこの時代精神が如何に表現されているかについて詳細に述べる段になると，時に朦朧と姿をかくしてしまう。しかるに長い目でみると流行の変遷の意義がわかるようである。』と。そして彼は西欧におけるコスチュームの変遷の中にその時代の理想を指摘しているし，建築様式や室内装飾との関連についても考察している。

我々の身近かな経験からもこの事は明らかである。つまり第二次世界大戦後，わが国における年配の婦人達の間に洋服着用者が多くなったり，髪を短かくしパーマネントウェーブをするようになったのは，青年の若さやアメリカナイズの表われとみることができる。さらに最近の若い婦人達のスカート丈の極端に短かいのはマス・プロやマス・コミにより方向づけられ，営利性に基づく商業政策がヤングをもてはやす結果とはいうものゝ，このこと自体，ヤングを通り越して幼稚さを象徴しているものゝようである。ひいてはヤングの精神的幼稚さを誘導している，とみるのは不当であろうか。同時に性的刺戟にもなっている。これに反撥する傾向，これを補償する傾向はパンタロン・ミディ・マキシなどの多様化を生み出している。Anspach[④]も『服装における成功した流行は時代精神を充分表出しているようである。では流行のスタイルは何故文化のシンボルなのか？，この問に対する答は，文化的環境・流行に対する人々の要求・流行品の製造の三者間の相互依存的関係の中に存在する。この関係は図１のように円形の流れとして展望することができる。

流行に対する要求は社会的に進展する。一度要求が起ると，この要求を満たすための製造が試みられる：そのうちのあるものが人々に受入れられ明確な形の流行商品になる。流行を受入れる過程において，暗示的な着想が人々の注意を惹く。人々はこれまでのものとは異なる新奇さによって新しい反応を呼びさまされる。けれども一度流行が採用されると，新しく呼びさまされた反応は人

間生活のスタイルの一部になり，そして流行は文化的精神を象徴化するように見える。かくして流行は文化を再び形成するために作用する。文化的環境を変化することによって，人々は新しい態度や価値観を促進され，交互に，それは新しい要求を誘発し，流行の円運動が再び始まる。』と。文化的環境が流行を推進するのに必要欠くことのできない要素であると考え，流行現象は文化の象徴化でもあると，している。

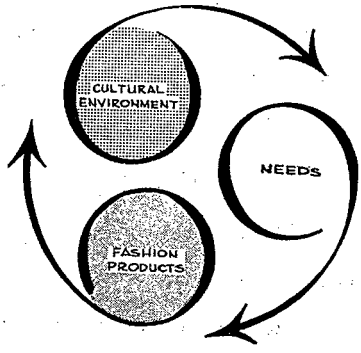

図 1

さらに，彼のいう円運動の要素の一つである“need”の問題であるが，Young[③]は次の如く述べている。『流行は変化を求める我々の願望・逸脱を求める願望・他人とは異なっていることを求める願望の上に支えられている。年の初めになると，我々は新しい着物の調製・住居の改良・新しい自動車の購入などを確保する。この変化を求める願望のうち，どれだけが純粋にあきあきしたことに対する心理的作用なのか，そしてどれだけが流行の文化的パターンの自然の成行きなのか，を語ることは困難である。』と。しかし流行を支えている人間の願望とか要求を否定することは出来ないようである。雑誌 Pont の中の記事で，『流行の受容は共通の価値観に立っている。』という意味のことを読んだことがある。Anspach[④]も『変化の価値における信頼が社会を通じて流行の受容を支えている。』と，人間の価値観の問題を提起している。

最後に円運動の要素“流行品の製造”の問題であるが，Anspach[④]は『浪費をゆるす豊かな技術文明が流行の実現に原動力をあたえる。』と述べているが，もっともなことである。

以上，流行をつくり出す要素およびそれを支えている人間の心理にも言及したわけであるが，社会生活における人間の心理の問題，つまり上述の模倣・競

争や価値観にしても，人間の要求や願望にしても，社会心理学者達の追求するところであり，ここで一寸彼等の流行に関する心理学的理論に耳を傾けることにする。

(3) 流行の社会心理学的理論

Herbert G. Blumer[5]は次の如く述べている。『心理学的説明は，概して世間に広く行われている社会的形態の固定化に反対する革命の感覚の表明として流行を取扱っている。学者達のある人は，退屈や倦怠から逃がれようとする努力，特にレジャークラスにおける場合を重要と見做している。ある人は流行を日常生活を粉飾するための遊びに満ちた気まぐれな刺戟に帰している。ある人は新奇な形態に突入することからくる興奮に重点をおいている。また他の人は流行をかくされた性的興味の象徴的表われと見做している。特に重要なのは，1931年 Edward Sapir によって明言された見解であり，即ち流行は自己の魅力に何かを附加することの努力である；流行はこれまで広く行われていた社会的形態から，新奇でしかも社会的に容認された出発を通して，自己を再発見する手段のように思われる，結局人格的威信または名声に対する願望の足跡である。』と，心理学者達の流行に対する見解を紹介し，『これら種々の心理学的説明は不充分であり，種々のフィーリングが流行過程を上昇へ導びくのは何故であるか，また如何にしてそのような過程をあたえるのか，を説明していない。……フィーリングの演出のための媒体として流行の存在を予想する。』と述べて，流行がその過程において上昇を辿り頂上に達して衰退するが，それはフィーリングの問題であるとして提起している。

Kimball Young[3]も心理学的立場から種々の見解を述べているが，その中で，『人間の行動や態度に関する流行の影響は，流行のスタイルが人々に受けない時には如何にいまわしく見えようとも，一旦受入れられると殆んど如何なるものも美しく適切であるように見える。』と述べているのは面白い。そのよき例は

現代のミニスカートの流行である。辛うじてお尻がかくれる位の長さのスカート丈は戦前では予想だにしなかったものだし，もしそのようなものが着用されたとしたら恐らく性的刺戟を徴発するいまわしい衣服として排斥されたに違いないが，現在では若さの象徴とも考えられ，我々はそれに慣らされてしまっている。このミニは時代思想の一面を象徴していることは前述の通りである。

さらに流行に対する人間の態度や行動について，阿閉吉男氏[6]は『社会心理学的にみれば，流行のさきがけをなすものは，自己を他のものからきわだたせようとし，流行を追うものは他のものからおくれまいとしており，いずれのものにも自己主張の傾向がある。流行の渦中にあるものは，人目をひく着物を着たり，奇抜な髪を結うことによって，自己の存在を明白ならしめようとする。そこには自己主張があり，虚栄があるとみてさしつかえない。このような個人の自己主張が，自我の確立を特徴とする近代社会において顕著であることは，いうまでもない。』と述べているが，Young[3]も『我々は，我々の自己主張への欲望，社会的に自己の存在を明らかにする行動をとろうとする欲望が流行と流行の変化を増進する力強い要素であるということを疑う余地はない。』と述べている。

最後に，流行を論ずる時，社会心理学者の誰もが引用している有名なSimmelの見解を述べる。Young によるSimmel の紹介は次の如くである。『ドイツの社会学者 Georg Simmel は，流行における社会的同調性と個性化のこの明らかな矛盾を分析した。流行は新奇を求め，差異を求め，個性化を求める願望を満足させ，そしてしかも同時に社会的適合と行動の一致をつくり出す。一旦形成された流行は社会において，ある性格を完成するものである。つまり流行は conformity, security and social solidarity を求める願望と，distinction, individuality and differentiation を求める願望との間のよき平衡を得てその性格を完成する。』と。即ち人間は自己の属する社会から取残されたくないという気持がはたらくと同時に，一方自己を誇示し個性を強調したいと思う

ものであるが，被服の流行もこの一見矛盾する心理の平衡を維持しつゝ変化してゆく。

(4) 被服の流行現象の分析

前述の如く流行現象はその時代の文化のシンボルでもあるが，各時代の服装の流行現象を概観することは服装の文化史を辿ることになる。この膨大な流行現象を Flügel[1] は次の方法で分析している。即ち彼は流行に変化をあたえる幾つかの変数を考え，その変数および変数の相関々係を図によって示している。

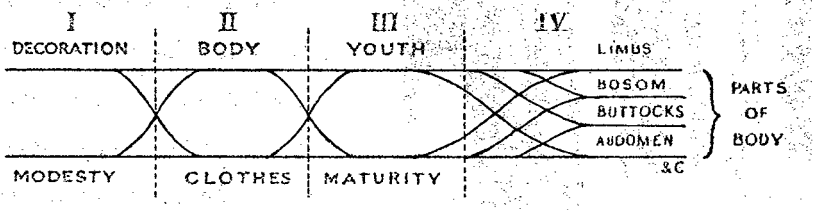

図 2

それは図2のようで，彼の説明は次の通りである。『各関数の両極端を，変数Ⅰでは Decoration と Modesty，変数Ⅱでは Body と Clothe，変数Ⅲでは Youth と Maturity とし，変数Ⅳでは人体の部位つまり Limes・Bosom・Buttocks・Abdomen などとする。なおこの図は変数を網羅していない。他の変数を加えることができる。例えば男性的象徴(male) と女性的象徴(female) のような変数，コスチュームの全体に重点がおかれているか一部におかれているかなど。流行服はこれら種々の変数の一方の極端を示す場合もあるが，他方の極端に移行してゆく時に種々の段階に変化するものである。そしてまたこれらの変数ⅠおよびⅡ・Ⅲ・Ⅳは互に独立ではなく，装飾に重点をおくが，その装飾は人体をひきたゝせる役目をし，しかも若さを強調し，そのためすんなりした四肢を強調するような装飾の仕方をするなどである。』と。この図および説明を式に導びくと，流行＝f(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ…)となり，流行は変数Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

写真２．　中世の男女の服装

・Ⅳの関数である。変数Ⅰおよび Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは互に独立ではないから，さらにⅠ＝f（Ⅱ），Ⅱ＝f（Ⅰ）のように変数Ⅰは変数Ⅱまたは Ⅲまたは Ⅳの関数，Ⅱおよび Ⅲ・Ⅳも同様の関係が成立する。

順次，変数の各々について概要を紹介する。

『変数Ⅰ．装飾を多くして人目を惹く服装が成功した時代があり，またそれがきびしく禁じられた時代がある。写真(2)の中世の男女の服装と，写真(3)のフランスのロココ時代の婦人の服装を比較するとよくわかる。

写真３．　フランスのロココ時代の服装

変数II．同じ人目を惹く服装であっても，人体を強調する場合と衣服を強調する場合とがある。写真(4)の銅像の着ているドレイパリーはギリシャの神々しい猟人にピッタリあっていて，人体の形を魅力的にあらわし，人体自身がもつ魅力以上のものをあたえている。もっと豪華で，しかも同じ目的にかなうコスチュームもありうるわけである，写真(5)の豪華で装飾的な装具が大部分裸体の着用者の肉体を浮立たせている。この場合装具の色を重く出すことは避けねばならない。一方衣服自体を強調

写真4．　ギリシャ猟人の服装

する場合のものは公式宮廷服によく見られる。写真(6)のルイ14世の姿は贅沢なブラ下り物を剝いでしまうと貧弱なものになってしまう。これをみると人体は衣裳掛にすぎないように思われる。以上は極端な場合であるが勿論これら両極端の間には段階があり，それに合せて流行は変化の鐘を鳴らす。

写真5．　舞台衣裳

変数III．近代になって第IIIの変数があらわれた。というのは第一次世界大戦以来，青年の存在が目立ってきたから。そして成年も青

年の理想を象徴するかの如く，ショートスカートや簡単なデザインの衣服を採用するようになった。しかし過去においては今日より成年の婦人達は社会的に高く評価された。従って流行は成熟した姿を理想としたものであった。

変数Ⅳ．流行のあらゆる変数の中で最も明らかで重要なことは体の部位に関するものであろう。中世の大部分は婦人の衣服を禁欲主義的な調子の

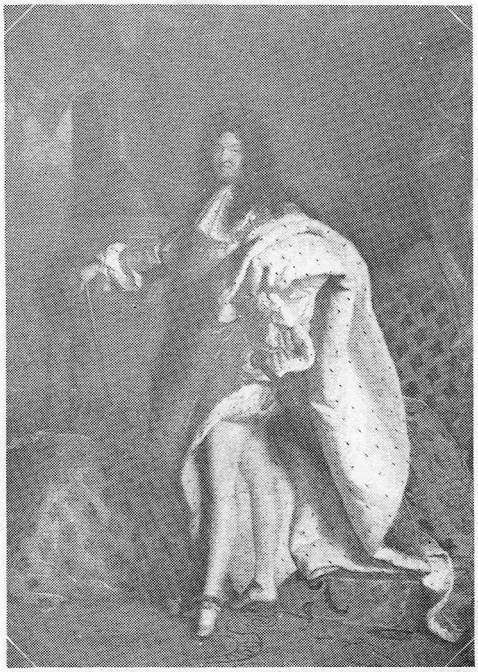

写真６．　ルイ14世の服装

a　b　c　d

写真７．

ものにした。女性の特徴をあらわす胸を目立たないようにし，このためコーセットで胸のふくらみをおさえた。

ルネッサンス時代になると禁欲的な傾向は姿を消し，エロティックな調子があらわれはじめた。ルネッサンス初期には，写真(7)の(a)のように婦人の服装は腹部に興味の中心がおかれ，腹部が目立つようにつくられ，あたかも妊娠を思わせるようであった。

18世紀には腹部強調が廃止され，胸部や臀部を強調するため，硬いコーセットの使用がはじまり，これで腰をきつく縛ってハイヒールの靴が用いられた。そして写真(7)の(c)のようにスカートの部分は大波のゆれるように嵩張ったものになった。また19世紀後半には臀部の強調がみられ，写真(7)の(d)のようなスタイルになった。

現代においては興味の中心が軀幹部から四肢部に移った。袖は腕の優美な線をあらわすため，ノースリーブになったり，タイトスリーブになったりした。幾世紀もの間かくされていた下肢はやっと覆いものから出てきて，婦人達も二本脚であることを示した。この四肢の強調の中に我々は若さをみることができる。』と，彼の言わんとするところの概要は以上の通りである。Flügel の著書は初版が1930年の発行であるから，今から40有余年前になる。今日の流行はさらに増々若さの強調に重点がおかれ，人体を強調し，四肢の露出の程度が幼稚さにまで発展してきている。

Ⅳ　要　　約

以上要約すると，流行は社会生活において変化が容易に起りうるような社会制度のもとでは存在するが，固定した社会制度のもとでは見受けられない，とは学者達の共通した見解である。そして慣習との相違は，流行が変化すること自体にその特徴をもち流動的であること，しかし fad とは異なり，流行は歴史の流れの中に存在し，流行現象は時代の文化を象徴していること，などがその

本質としてあげられる。

被服の流行において，その起原が流動的な階級制度の社会に発し，人間の新奇を求め，個性を発揮したいと望む気持に基づいて流行が創り出されて伝播し，社会生活を支えている人間の模倣と競争とが流行の存在を推進している。流行の過程における問題として，フィーリングの問題・時代の価値観の問題が提起されている。

被服の流行の考察の中に，流行に対する社会心理学的理論が結論される。その第一は，Simmel の流行における社会的同調性と個性化の矛盾の分析である。それは流行が新奇を求め，差異を求め，個性化を求める人間の要求を満足させ，同時に社会的適合と行動の一致をつくり出し，そして形成された流行は社会において，ある性格を完成するものであるということ。この前者の要求は人間の自己主張の本能に基づいていること。Anspach は現代の流行の構造を，“文化的環境”と“人間の要求”と“流行品の製造”の三要素の円運動として把握していること。などが主なるものである。

最後に，服装の流行現象について Flügel のユニークな分析を紹介した。それは種々の変数を設定して，流行はそれら変数の関数である，としていることである。

以上，被服の流行を俎上にして，流行の社会心理学的見地からの考察を展望したわけであるが，社会集団の行動と流行の関係，流行の姿の特徴（多少は触れたが），流行の周期の問題，流行と購買動機との関係，その他多くの問題を残して，この稿を終る。

文　　献

① J. C. Flügel：The Psychology of Clothes, page 122～166, The International Psycho-analytical Library No. 18, 1950

② 荻村昭男：服装大百科事典　下巻 504～505頁，文化服装学院出版局，昭和44年

③ Kimball Young：Social Psychology, page 411～428, Appeleton-century-

crafts, inc. New York, 1944

④ Karlyne Anspach : The Why of Fashion, The Iowa State University Press, 1967

⑤ Herbert G. Blumer : International Encyclopedia of the Social Science vol. 5 page 341～345, 1968

⑥ 阿閉吉男:社会科学大事典 19巻 51～52頁, 株式会社鹿島研究所出版会, 1971

⑦ Madge Garland : Fashion, Penguin Books Q26, 1962